

プロイセン文部官僚と教授達

— アルトホーフ体制の現代的意味 —

潮 木 守 一

目 次

アルトホーフ体制
学問研究の組織化、巨大化とその資金源
アルトホーフの人事政策
教授会の機能
ロッツェ後任事件
学問の自由とアルトホーフ
ウェーバーとパウルゼン

プロイセン文部官僚と教授達

— アルトホーフ体制の現代的意味 —

潮 木 守 一 *

アルトホーフ体制

ドレスデンで大学教員会議の第4回目の会議が開催されたのは、1911年10月のことであった。この会議の第二日目には、「北アメリカの大学におけるドイツの大学と異なる諸制度」というテーマをめぐって報告と討論が行われたが、マックス・ウェーバーもまた報告者の一人として壇上に立った。ウェーバーは1904年、他のドイツ大学教授達とともに、丁度その頃開始されたアメリカ・ドイツの大学教授交換プログラムの一貫として、アメリカを訪問してきたところであった。この報告のなかで、ウェーバーは始めのうちは、アメリカ大学についての彼の印象を、ドイツ大学との対比のなかで語っていたが、後半になると、本題をそっちのけにして、ある人物の名前をあげて、かなりはげしい調子で批判し始めた。その人物とは、それより3年程前この世を去った、アルトホーフと称する人物のことである。¹⁾

ところで、ウェーバーが名指しで批判したアルトホーフとは、そもそもいかなる人物だったのであろうか。彼は1882年から1907年にいたるまでの25年間、5人もの文部大臣のもとで、プロイセン文部省の大学行政の中心的ポストにあり、最後には大学局長となった人物である。彼は在任中、ベルリンの文部省の一室のなかから、プロイセンの大学のみならず、全ドイツの大学に対して、絶大な影響力を発揮した高級文部官僚であった。そもそも四分の一世紀にわたる在職が異例であったばかりでなく、彼の在任中、ドイツの高等教育は稀に見る「発展」をとげた。たとえば、彼がプロイセン文部省に足を踏み入れた時、大学に関する経常予算は757万マルクに過ぎなかった。ところが、彼が辞任する時にはその2倍強の1,665万マルクに達していた。更に大学の臨時経費を見ると、彼の着任時点では、157万マルクに過ぎなかったものが、彼の辞任時には398万マルクにまで達していた。

こうした数字が雄弁に物語っているように、アルトホーフは、多額の大学予算を大蔵省から引き出し、プロイセン大学を発展に導いた、ドイツの大学史上稀に見る、きわめて有能な大学行政官僚であった。彼は「ふところにピストルを用意する覚悟」で、大蔵省とかけ合い、多額の大学予算獲得のためにつとめた。彼の並々ならぬ行政手腕のおかげで、教授ポストを作ってもらった者、研究施設を新設してもらった者、研究費予算をつけてもらった教授はきわめて多かった。だから彼はドイツ大学の「啓蒙専制君主」とまでいわれた。²⁾ 更には「影の文部大臣」、「高等教育のビスマルク」ともいわれた。

ところがウェーバーは、このドイツ大学行政史上まれに見る大物高級官僚に向けて、批判の矢を放ち始めたのである。しかし、ウェーバーのアルトホーフ批判は、一方的に批判の言葉を並べるといった類のものではない。そのトーンはかなり複雑である。この複雑なトーンこそ、アルトホーフという存在の複雑さを反映しているように見える。まず、もうすこしウェーバーの言葉をたどって見ることにしよう。

「この人について語るのは非常にむづかしいことです。彼は、単に語の固有の意味で実によい人間で

* 名古屋大学教育学部教授

あったばかりか、きわめて視野の広い男でありました。事実、彼は自分のことを、「私は個々の大学の諸兄よりも広くものを見ている」といえたほどであります。またその上、アルトホフは、ドイツの大学にとってある意味で不朽の価値をもつことをなした男でもありました。彼は、およそこれ以上徹底したものは考えられないというほどの縄張り愛国心の持主でありました。かつて彼は私にむかってこういったことがあります。「ミクエル(大蔵)大臣のところへ行くときは、今後いつでもピストルを携行するつもりだ。そうでもしなければ、この男から大学に必要な予算額を分捕れないのだから」と。したがって、彼は、行政手段と研究機関にがんするすべての点で、プロセインの大学をきわだって高い水準まで引きあげたのであります。そして人事の面からいいますと、いくら強調しても強調しすぎることはないと思いますが、ここでも彼にとっては縄張り愛国心が決定的なものだったのです。彼のもとでは閥族主義はありませんでした。ともかく、ふつつ思い浮かべるような意味での閥族主義はなかったのです。むろん彼とても[人事で]誤りを犯しかねなかったし、また実際に犯してもいます。しかし、場合によっては、ドイツの諸大学よりももっとりっぱな選択を行ったこともあるのです。ただひとつ保留として付け加えておかねばならないことがあります。人事を扱うさい、彼は、自分がかかわりあいをもったものはだれでも腹ぐるい男であるか、あるいはそうでなくとも、少くとも低俗な立身出世主義者である、という観念から出発したのです³⁾。

後世に伝え残されたアルトホーフに対する評価を読むと、実に大きな幅をもって揺れている。一人の人物についての評価が、これほど分かれるのも珍しい。或る者に言わせれば、彼ほど大学の自治、学問の自由を踏みにじった人間はいないということになるし、また或る者からすれば、彼ほど大学の自治を擁護した者はいない、ということになる。更にはまた、彼ほどえこひいきのひどかった人間はいないという声があるかと思えば、彼ほど物事を公平に扱った者はいない、と評価もある。まさにウェーバーがいったように、「この人物について語ることは非常にむずかしい」。

しかし考えてみれば、絶大な実権を握った者に対する評価とは、もともとこういうものなのであろう。権力者に近づくことに成功した者からすれば、彼ほど視野の広い人間は、さらにはないという話になるのだろうし、彼に受け入れられなかった者の目からすれば、あれほど話のわからない人間はない、ということになろう。彼に何らかの恩恵を蒙った者からすれば、彼ほど先を見る目を持った者はないということになろうが、その恩恵にあずかることの出来なかった者からすれば、それは憎悪の対象となるのであろう。いずれにせよ、毀誉褒貶ははっきり分かれれば、分かれるほど、彼の権勢が、いかに絶大であったかを物語る、何よりも証拠と見るべきなのであろう。事実、アルトホーフは高級文部官僚としての権限をフルに使って、或る時は金をちらつかせ、或る時は昇進を餌として、大学の教師を自由にあやつった「ドイツ高等教育のビスマルク」だったのである。

ところで、問題は一体どうしてこんな事態が出現したのかという点である。どうしてたった一人の文部高級官僚が、ドイツの大学、学術、科学全体を支配するようなことになったのであろうか。我々はこうした疑問につき当る。この疑問を解くために、ここでウェーバーのほかにも、もう一人の証人に登場してもらわねばならない。その証人とは経済学者として著名なウェルナー・ゾンバルト(Werner Sombart)のことである。

彼は、1907年8月、ウィーンから発行されている新聞に「アルトホーフ」なる一文を発表した。そのなかでゾンバルトは、こうに論じている。⁴⁾

「アルトホーフは近年きわめて著名となった。今や広い範囲の人々が皆知っている。彼は今やプロイセン王朝のなかでは、最も権力を持った人物の一人となった。彼の権力は今や半ダースの大臣にも匹敵するまでになった。とくに最近、彼の辞任の噂が立ち始めてからというもの、ドイツの新聞はしきりに彼のことを論じ、『アルトホーフ体制』をかつてのビューロー体制、あるいはボザドフスキー体制以上の怒りをもって論評している。自由党はこの陰險な専制君主が舞台をしりぞくことによって、新しい時代の夜明けが来るとでも思っているようだ。

ところで、どうして彼等はいかにもアルトホーフを憎むのだろうか。彼等の憎しみは、アルトホーフの『体制』に向けられているのだ。だから、彼等の憎しみを理解するためには、その『体制』を知らねばなるまい。だがしかし、わずか数行でそれを記述することは出来るであろうか。こころみにそれをやってみるがよかろう。そしてアルトホーフ個人と、その体制が、本当に憎しみに値するものかどうか、判決文を書いてみるがよかろう。たしかに、アルトホーフは教授諸氏を侮蔑をもって遇した。文部省内の薄暗い待合室で、教授達を何時間も待たせておいて平気だった。教授達に彼の前では、直立不動の姿勢をとるよう教え込んだのも彼である。彼は大学そのものを傷つけ、その地位を低下させた。」

しかしここで、ゾンバルトは次のような疑問を呈する。「ところでそれならば、どうして大学も学部も彼のいいなりになっていたのでしょうか。このサボタージュのはやる時代に、なぜストライキをもって、あるいは職を賭してでも、対抗しなかったのでしょうか」こうした疑問に対して、ゾンバルトは次のような解答を引き出す。「それは要するに、すべての人にとって、彼はボスだったからである。奴隷根性の持主に向かって、強者が血も涙もない支配者として君臨したとしても、それはけっして偶然のきまぐれからではない。今日ほど教授達の中に、奴隷根性が広まった時代は、果して他にあるだろうか。アルトホーフ以上に人事担当官が、まるで王侯のように振舞った時代があったであろうか。」

ゾンバルトの論は、更に現代における大学の変質とアルトホーフ体制との関連に及んでいく。

「今や我々の大学は、純然たる専門学校になり下ろうとしている。そこで教えられていることは、9割までが技術なのだ。専門分化の進行、機械化の進行は個人を魂のない部分品に変えた。それは巨大な機械のなかの一つの歯車に過ぎない。こうした歯車だったならば、いくらでも交換することが出来る。それと同様、大学教授もまた（教師としてであれ、学者としてであれ）今や、その辺の校長や図書館員と同じく、いくらでも交換出来る存在となったのだ。アルトホーフはリアリストとして、現にあるがままのものとして大学教授を遇したのだ。彼はけっして大学教授を、教授達自身が胸のなかで考えているようなものとしては、とらえなかった。しかしその反面では、本当の才能の持主のためとあらば、学部側の意志に反してでも、彼の権力を持ちいて、その人事の実現を目指した。つまり彼は現実的な意味についての優れたセンスを持っていたのだ。重要な目標とは何か、優れた人物とは誰か。こうした点についてのきわめて優れたセンスを彼は持っていたのだ。

こう見てくると、一体『アルトホーフ体制』とは何なのであろうか。それに対する答えはこうなる。徹底したリアリズム。行為、状況、人間をあるがままに見すえるリアリズム。またあるがままのものとして処遇するリアリズム。これがアルトホーフ体制の本質なのだ。だから今日の大学は、アルトホーフがそう作り上げようとしたから、こうなったのだ、と考えるのは子供じみている。アルトホーフもまた、無言のうちに進行している現実の変化を、はっきり見てとれるような形に変える以上のことは、何も出来なかったのだ。だから『アルトホーフ体制』は原因だったのではない。それは一つの作用だったのである。」

このゾンバルトの短い文章のなかには、さらなる説明を要する要素が、きわめて豊富に含まれている。彼のアルトホーフ評価の根底を理解するためには、当時のドイツの大学がいかなる状況にあったのか、そのなかで大学教授がいかなる状況のもとにおかれていたのか、それを説明しなければなるまい。更にどうして彼がそんなに、教授人事を牛耳ることが出来たのかという疑問に対しては、その当時の教授任命の方式を説明する必要があるであろう。更にはまた、19世紀末から20世紀初頭にかけての学問研究をめぐる状況変化を説明しなければなるまい。そこで、ここではさしあたり最後のポイントから、若干説明しておくこととしよう。

学問研究の組織化、巨大化とその資金源

アルトホーフが大学、学術、科学など広範な分野にまたがる行政運営権を掌中に納めた時期は、丁度ドイツの、そして世界の学問が、一つの転換点にさしかかった時期に当たっている。⁵⁾ つまり、学問研究がそれまでのように、個人の頭脳、アイデアに依存する段階を通り越して、かなり多額の資金に依存せざるをえない段階にさしかかっていた。かつての時代の学者は、乏しい財布を頭脳によってカバーすることが出来たが、今や優れたアイデアといえども、潤沢な資金なくしては、具体的な成果として示すことができない段階に達し始めていた。このことはとくに、自然科学、医学の分野でそうだった。すべての領域がそうだった訳ではないとしても、資金さえ投入すれば、確実に学問上の進歩が予測でき、その資金が与えられなければ、それだけで既に、たいした研究成果が期待できないことが、十分予測できるような段階にさしかかり始めていた。こうした段階においては、まず問題となるのは、いかにしてそのための資金を獲得するかである。つまり、それぞれの学問分野で、突出した業績を示すとすれば、実験室を作り、実験装置を整え、多くの助手を雇い、多額の研究室予算を確保しない限り、どうにもならない段階に達し始めていた。⁶⁾

これに対して、人文科学、社会科学の領域では、若干事情を異にしたが、それでも多かれ少なかれ状況は似ていた。どの学問領域もその専門化、細分化とともに、これまで以上の講座を必要とし、多くの図書、研究資料を収集するための資金、これらの図書、研究資料を分析する研究補助員を雇い上げるための資金を必要としはじめていた。つまり、どの教授も研究資金を必要とし、更なる講座増設を求めているのである。

それではこうした資金はどこから調達できるというのであろうか。ここで我々はこの当時の状況を理解するために、若干目をドイツからアメリカに転じてみよう。その当時のアメリカでは、巨大な民間資本がありあまる資金をもとに、次々と大型大学を作り上げつつあった。1873年ジョンズ・ホプキンスは700万ドルの遺産を、大学と病院のために残した。1874年ジョンズ・ホプキンス大学は、350万ドルの基金をもって開校された。更に1889年、カルフォルニアのゴールド・ラッシュで莫大な財産を築いた実業家、ジェナス・G・クラークは100万ドルの基金をもとに、クラーク大学を発足させた。更に1892年にはスタンダード石油のロックフェラーは、3,500万ドルという空前絶後の資金をもとに、シカゴ大学を創設した。⁷⁾ 更には、1891年セントラル・パシフィック鉄道のスタンフォードは、2000万ドルの資金を投じて、彼の名前と、今はなき彼の一人息子の両者の名前を後世に伝え残すために、リーランド・スタンフォード・ジュニア大学を発足させた。⁸⁾ ルドルフは19世紀末のアメリカを「モニュメンタリズム」の時代と名づけたが、資産家達の多くが、自分の名前を末代まで残すため、

大学、天文台、博物館、美術館にと基金を投入していた。⁹⁾

ただこのように何万ドル、何百万ドルといった数字を並べても、余り実感がわくまい。そこで若干でもこれらの数字の重みを理解するため、いくつかの比較をこころみしてみよう。1900年ベルリン大学の年間総予算は經常費、臨時費合わせて432万2067マルクであった。¹⁰⁾ また同じ年の東京帝国大学の年間歳出総額は、經常費、臨時費合わせて94万9229円だったとされている。¹¹⁾ これらは今その当時のドル価格に換算してみると、ベルリン大学の総予算はほぼ103万ドル、東京帝国大学の総予算は47万ドルということになる。¹²⁾

つまり、ベルリン大学の年間予算が約100万ドル、東京帝国大学のそれが約50万ドルの頃に、アメリカでは350万ドル、500万ドル、3,500万ドルといった巨額の資金が、一大学設立のために投じられていたのである。つまりロックフェラーがシカゴ大学のために投じた資金は、ベルリン大学の年間経費の35年分に当り、東京帝国大学の70年分に相当した。またスタンフォードがその大学のために投じた資金は、ベルリン大学の20年分の年間予算に匹敵し、東京帝国大学の40年分の予算に当った。

このようにアメリカでは、高等教育に対して大量の民間資金が流れ込んだが、ドイツでは必ずしもそうではなかった。ドイツの大学は何よりもまず「国家の施設」であり、そのための資金を獲得するとなれば、政府の財布をあてにする外、道はなかった。たしかにこうしたアメリカでの動きに刺激され、ドイツでも民間資金の大学への導入がはかられつつあった。アルトホーフ自身がその音頭取りだったのだが、こうした「アメリカ方式」はしばしば大学側の抵抗にぶつかり、それほどまでには進展を見せなかった。つまりドイツの大学にとっては、金づるはあくまでも政府にあり、より具体的にいえば、文部省内で実権を握っている一握りの高級官僚の手の中にあっただ。¹³⁾

事実、アルトホーフはその在任中、大蔵省からふところにピストルを用意するようにして獲得した莫大な大学予算をもとに、おびただしい教授ポスト、これまたおびただしい研究所、実験施設、付属病院を作り上げた。彼はその在任中、9つ以上の法学研究施設（ゼミナール）を開設し、4つの神学研究施設を作り、86の医学の研究所、実験室、病院を建設し、哲学部には77の研究施設を創設した。¹⁴⁾ また総合大学の正教授のポストは、1880年の941人から、1910年には1236人、つまり1.3倍に拡大し、295名の増加を見た。¹⁵⁾

だからドイツの教授達は、アルトホーフのもとへと日参した。そして薄暗い待合室のなかで、長時間待たされ、その間にいいしれぬ屈辱感を胸のなかでたぎらせた。この待合室のなかでは、著名教授といえども一介の「マネー・ベガー」でしかなかった。アルトホーフは「心の底から教授達を軽蔑していたが、学者は尊敬していた」という見方も一方ではある。¹⁶⁾ しかし、この日光のさし込まぬ待合室のなかで、自分は単なる教授ではないのだ、学者なのだ、自分にいい聞かせることに成功した者は、果してどれほどいたか、疑問としなければなるまい。「アルトホーフほど教授達の心理をその奥底まで見抜いていた者はいなかった」とある教授は記しているが、それを自信をもって否定出来る者はおるまい。

だから、多くの大学教授はアルトホーフのことを恐れていた。彼は大学の運営面でも、大学予算の配分面でも、絶大な権限をもっていた。そればかりでなく、あちこちの大学に情報網をはりめぐらせ、個々の教授達の言動につき、その研究業績について、誰よりも多くの情報を握っていた。ウェーバーが先に引用した文章のなかでいっているように、彼は自分のことを、「私は個々の大学の諸兄よりも広くものを見ている」と胸をはることができたのである。彼はこうした情報をもとに、どの大学に、どの教授のところに研究施設を新設するか、どこの大学のどこの学部にかなる教授職を新設するかを

決定していたのである。したがって、教授達は彼のことを恐れていただけではない。自ら進んで、彼に依存しようとした。そして彼にとり入ろうとした。何しろ予算を獲得するためには、アルトホーフにとり入らなければならず、またアルトホーフにとり入ることに成功しさえすれば、予算を獲得出来たも同然だったからである。ここに教授達の胸の中にゾンバルトのいう奴隷根性が育ちあがる原因があった。ゾンバルドが鋭くも見抜いたように、アルトホーフ体制とはアルトホーフ一人が築き上げたものではなく、教授達の内面にひそむ「奴隷根性」の産物でもあった。アルトホーフ＝専制君主，教授達＝臣下という関係は、両者が協同してこの地上に構築した一つの「体制」だったのである。

アルトホーフの人事政策

金を握った者は、人事をも握る。文部省内の薄暗い一室へと足をはこんだのは、研究費の欲しい教授ばかりではなかった。どこか大学にポストはないかと願っていた若い私講師達もまた、文部省内の薄暗い一室へと、しばしば足を運んだ。その当時、ドイツのアカデミズムの世界では、40歳、50歳になっても、正教授になることのできない研究者、現代的な表現をもってすれば、大量のオーバードクターがまたにあふれていた。彼等はポストを求めている。そうした彼等にすれば、不安定で惨めな私講師という境遇から抜け出すためには、どうしてもアルトホーフに接近しておくことが必要であった。だから彼等はしばしば文部省へと、足をはこんだ。あるいはまた、アルトホーフからちょっと会いたいと声をかけられ、何がしかの期待感に胸をはずませ、文部省へと出かけていった。ラートブルフはかつての私講師時代の体験をこう書き残している。「私の私講師時代の初期の年に、アルトホーフは一時私を自分のところに呼んだ。私には早まった期待を生じたが、それは苦くも当はずれに終わった。4時間待って、ついにかれの執務室にはいることを許されたときに、かれは私から一連の同僚のことを聞きだそうとした。それに対して私はおく病に、とぎれとぎれにしか答えられなかった。」¹⁷⁾

しかし、すべての者がそうだったわけではない。マイネッケのように、絶対アルトホーフのもとに足をはこばなかった者もいる。彼はきわめて長い間、国立公文書館員として、うだつの上がない生活を続けていた。彼もまた正教授のポストを求めている。しかし彼はアルトホーフに頭を下げたくはなかった。彼はその当時の心境を、こう書き残している。「アルトホーフもまた、我々には格好の反抗の材料を提供してくれた。彼が学問の世界で果した功績は、もはやここでくり返すまでもなからう。しかし我々はその当時、彼がいかにして学者の人格を思うままにあやつり、その人格をボロボロにするのか、直接の情報源から、いやというほど聞かされていた。私自身は彼の姿を、はるか遠くから見かけたことが一度あるだけである。しかし私には自尊心があった。文部省に嘆願に行き、その待合室にかかっている詩を読むはめに陥ることだけはしたくなかった。その詩とはこういうものであった。「この部屋で私はしばしば考えた。人は希望を胸に抱きながらも、この部屋のなかで、次第に年老いて行くのだと」。一度アルトホーフはオットー・ヒンツェを彼のもとに呼んだ。そして彼にいさかおべっか使いの匂いのする仕事をたのんだ。しかしヒンツェはそれを断った。するとアルトホーフは「マイネッケならやるだろうか」と、彼に尋ねた。これに対して、ヒンツェはいった。「断固としてやらないでしょう」¹⁸⁾

それではいったい、文部官僚アルトホーフは、どうしてそれほど簡単に、大学の教授人事を左右することが出来たのであろうか。このことを説明するためには、若干蛇足かもしれないが、その当時のドイツでの教授人事の進め方について説明しておかねばなるまい。

その当時、どこかの学部で教授ポストに空席が生じると、まず普通はその学部の教授会に対して、文部大臣から後任候補者を提案せよという指示が出される(ただこれはごく一般的なルールで、文部大臣がこうした指示を出さず、文部大臣が勝手に教授を選考した場合も、かなりある)。そうすると、その学部教授会は、文部大臣に向けて3名の候補者を、推薦順位をつけて提出することとなっていた(Dreiervorschlagという)。ところが、文部大臣はこの学部教授会からの推薦順位には拘束されず、たとえば、一位で推薦された者を飛び越して、第二位、第三位の候補者を教授として選択してもかまわなかった。更には、学部教授会からの推薦名簿にのっていない人物、つまり学部が全く推薦しなかった人物でも、文部大臣の権限のもとに、教授として任命することも出来た。つまり、文部大臣が学部教授会の行った提案に何がしかの異議、疑問がある時には(あるいは特に疑問点、疑義がなく、文部大臣が別の人間を教授にしたいと思えば)、学部教授会の提案とはかかわりなく、その提案を無視して、文部大臣の専決権を行使して、教授を任命することが出来た。つまり、文部大臣はこうした専決権(Oktoyierungと称した)が、与えられていたのである。

このように、一見すると、文部大臣はフリーハンドの任命権を持っていたかのように見える。しかし実際問題としては多くの場合、文部大臣は学部からの提案をそのまま受け入れた。たとえば、1817年から1882年までの期間に行われた教授人事のうち、全体の72%までが学部からの提案通りに人事が行われている。勿論誰が文部大臣の座にすわるかで、かなりの差があった。学部からの提案を全く無視した大臣、学部に対して後任候補者の提案さえ求めなかった大臣など、さまざまである。¹⁹⁾

こうした仕組のもとでは、それぞれの学部から提案されてくる候補者に吟味を加えることが、文部大臣の最大の任務ということになる。しかし、文部大臣は多くの場合、政治家で、学問的立場から教授候補者の適否を評価できる立場にあったわけではない。それに文部大臣はしばしば交替した。そうすると、文部大臣にかわって、実質的な権限を担うのが、高級文部官僚ということになる。しかし、この文部官僚もまたさまざまで、学部からの提案を内容的に吟味できる官僚ばかりとは限らなかった。学部からの提案にさからって、文部大臣の専決権を行使するには、それなりの材料と覚悟を必要とした。その時々々の政治状況で変化はあるものの、学部からの提案を拒否すれば、教授会が黙っているはずがなかった。まさに教授達と文部省とは、緊張関係にあったのであり、まかりまちがえば、両者の間に、双方の面子をかけた戦いが始まらないとも限らなかった。だから文部官僚といえども、そう簡単に伝家の宝刀を抜く訳にはいかなかったのである。だから文部官僚の立場からすれば、黙って学部からの提案を受け入れておくことが、大過なくその任期を勤め上げるのには、一番都合がよかった。ところが、アルトホーフはそうではなかった。

アルトホーフは、どこかの学部から彼のもとに、教授人事の提案が届くと、その候補者の学問水準を詳細に検討し、あらゆる関係雑誌から彼の学説に関する批判を収集し、周囲の人々からは、その候補者の教師としての力量を聴取しようとした。また彼にはこうした情報を集めるだけの能力があった。能力といっても、個人としての能力のことではなく、それだけの情報網、人脈をもっていた。彼の威力、怖さは、こうした見えざる人脈にあった。

アルトホーフはその周辺に幾人もの「取り巻き教授」をしたがえていた。取り巻き教授という表現がよくないとすれば、ブレインとなる教授達がいた。彼等はその側近としての地位を利用して、特別の予算の配分にあずかり、さまざまな研究施設を作ってもらったりしていた。なかには、その側近としての地位に喰い込むことをもって、無上の喜びとする教授もあった。権力者とツーカーであることは、その

教授自身の利益につながるばかりでなく、自分は他の平教授とは違うのだという優越感を育てるのにも十分であった。

教授会の機能

ともかく、教授人事がこうした仕組のもとで行われる以上、その過程に文部省の意思が関与しうる余地が十分にあった。しかもその上、こうした文部省の介入を許すだけの背景がそこにはあった。このことは教授選考におけるもう一方の当事者である学部教授会という組織の性格と、深くかかわっている。ウェーバーは先にも引用したように、「アルトホーフはドイツの諸大学よりも、立派な人事をやった」といった。またゾンバルトはゾンバルトで、彼は「本当の才能の持主のためとあらば、学部側の意思に反してでも、彼の権力を用いて、その人事の実現を目指した」ともいった。問題はまさに、こうしたウェーバー、ゾンバルトの指摘と深く関係する。ここで我々は、文部省という官僚機構ばかりでなく、もう一方の当事者である学部教授会という機構そのものに、メスをいれなければならない。この問題を検討するためには、ここでウェーバー、ゾンバルトに続いて第三の証人に証人台に立ってもらわねばならない。その証人とは、パウルゼンのことである。

パウルゼンは1902年、「ドイツ大学と大学教育」という本を出版した。そしてこの本のなかで、ドイツの大学で現に行われている教授選考の方式について、次のような説明を展開している。

「学部教授会の側からすれば、彼等の提案が無視されることは、学部教授会の見識、良心に対する耐えがたい侮蔑とうつつることであろう。そして、その背後には、政治的な思わくとか個人的なエコヒキが働いたと思いたがるものである。しかしその反面、教授会に対してもまた、さまざまな批判の矢が向けられてきたことも事実である。つまり、学部教授会の提案は、必ずしも常に、候補者個人の才能にもとづいてなされるのではなく、そこには、さまざまな人間関係とか、家族的なつながりとか、学派的な関係がからみついているというのである。つまり、実力以上にほめちぎったり、おべっかを使ってみたり、策謀をはりめぐらしたり、裏工作をしたり、さまざまなことが横行することになる。結局のところ、長い歴史のなかから登場してきたこうした教授任命方式は、我々にとっては、かなり適切な方式ということになる。ふさわしいポストにふさわしい人をすすめるには、これ以外にもっと良い方法などないのである」²⁰⁾

たしかに学部教授会というものは、諸々の利害関係のかたまりである。誰を教授の座にすえるかという段になると、どの教授も自分と親しい人物、自分の息のかかった者を連れて来ようとする。二人の候補者がいて、その学問的成果がほぼ同じということになれば、赤の他人よりも、気心の知れた相手の方がよいということになる。あるいはまた既にそこにいる教授のなかには、自分よりも学問的名声の高い者が、隣の研究室に來られては困ると思う教授もいることであろう。

パウルゼンは先に引用した本のなかでは、まだオブラートで包んだ解説を加えているが、その自伝のなかでは、きわめて厳しい教授会批判を展開している。彼は「教授会をもって、教授選考の唯一の決定機関とすることは、ドイツ大学を破滅に追いやる一番手っとり早い方法なのだ」とまで主張している。ここで我々は、どうしても彼の主張にもっと耳を傾けてみなければならなくなる。

「教授会の内側で、どんなことが行われているのか、一度でも自分の目で確かめたことのある者は、教授会の決定などというものに敬意を払う気にはなるまい。誰も責任感を感じない組織ほど、良心を欠

いた組織はない。候補者はたいていの場合、一人の教授か、彼と行動をともしする幾人かの教授の口から提案される。そこで教授会は専門家の意見を求めることになる。たいていの場合、そうでもしなければ、誰も自分の意見など作れないからである。そうしている間に、一人の教授の意見が、あたかも学部教授会全体の意見であるかのように、扮飾をほどこされていく。そしておよそ業績のない者が、絶賛を浴び、学問の輝かしい星として、ほめたたえられることになる。しかし大抵の場合、本当のねらいがどこにあるかと言えば、本来ならばそのポストにふさわしいのに、たまたま有力教授あたりのお眼鏡にかなわない者を、排除するためなのだ。そのため、はるかに優れた人物が話題にも登らなかったり、たとえ話題になったにせよ、いろいろケチをつけられ、不当な非難を浴びせられることになるのだ。私自身この自分の目で、これらのことを全部目撃してきた。だからはっきりここで言うことができるのだ。教授会を教授任命の唯一の決定機関にすることは、ドイツ大学を破滅に追いやる、一番手っとり早い方法なのだ。教授会の提案を上級機関が、更に吟味する方式があるからこそ、あまりいいかげんことが出来ないようになっているのだ。事実、中央機関のほうが、はるかに健全な決定を下す場合が多い。”²¹⁾

パウルゼンの教授会を批判する調子は、きわめて厳しい。何故彼はこのように厳しく教授会を批判するのか。この背後には、彼自身にまつわる苦い体験のあったことを、この際無視するわけにはいまい。彼は29歳のとき、ベルリン大学の私講師となり、32歳で助教授となったが、その後15年間、助教授の地位に甘じなければならなかった。この間、彼はベルリン大学哲学部のなかで孤立し、教授達とも余りつき合わず、わずかに教室内での学生との接触と研究活動のなかに、生きがいを求めていた。パウルゼン自身年々歳をとって行き、同年輩の者はどんどん正教授に昇進して行くのに、彼にはなかなかそのチャンスが訪れては来なかった。

ロ ッ ツ エ 後 任 事 件

1882年、彼が37歳の時、彼にとってはきわめてショッキングな事件が発生した。彼の尊敬するロツエ(Lotze)が死亡し、正教授のポストに空席が生じた。パウルゼン自身は、その時、自分がロツエの後任にふさわしいなどということは、夢にも考えていなかった、とその自伝のなかでは書いている。その時、ベルリン大学哲学部の教授会は、デイルタイとエルトマン(Benno Erdmann)を文部省に推薦しようとしていた。しかし、助教授であるパウルゼンには、そのことは一切知らされてはいなかった。教授人事はあくまでも、正教授だけで構成された学部教授会の権限で、その過程を外部にもらすことは、固くその構成員には禁じられていたからである。そんな1882年の夏、たまたま哲学部のパーティが開かれた。その席上、彼はシェーラー(Scherer)教授から声をかけられた。以下はその時の会話をパウルゼンが書いたものである。

「シェーラー教授はこういった。『まあこの辺にいっしょに座ろうではないか。すこし話もあるのでね』。しばらくは別の話をしていたが、そのうち彼はふと思いついたような口調で、こう私に尋ねた。『ところで君、エルトマンが今度ロツエの講座に座るという話を知っているかね』。私は驚いた。エルトマンといえば、まだ30歳そこそこで、私よりもはるかに歳も若く、学問上の地位も私よりもずっと下ではないか。私は思わず大声を上げた。『それは私にとっては、全く屈辱的なことです。そんなことになったら、私はここから出ていかねばなりません』。私は一度たりといえども、この自分がロツエの後継者にふさわしいなどと、考えたことはなかった。しかし、この自分よりもはるか歳下の者が、自

分の目の前で教授の座にすわることには、とうてい耐えられなかった。シェーラーはこうした私の昂奮ぶりを見て、しきりになだめようとした。そして、まだ最終的に話が決まったわけではないのだからといって、私を静めようとした。

パウルゼンはさっそくその翌日、ツエラー教授（Zeller）のもとを訪れ、もしエルトマンが正教授になるのなら、自分も同時に正教授に昇進させてくれと頼んだ。この話を聞いて、ツエラーは怒った。誰がこんな秘密事項を助教授にもらしたのか、というのである。そして、このパウルゼンの申し出をきっぱり断った。そこでパウルゼンは文部省に出かけ、同様な要求をくり返した。そして最後に、もし自分よりも年長の者が、正教授になるのなら、自分は今まで通り、助教授で我慢しようとも、つけ加えた。

そのうちに、ロツエの後任には、デイルタイが座ることが、正式に発表となった。果してパウルゼンのこうした動きが、どの程度教授会、あるいは文部省に影響を与えたかは、わからない。そのことはパウルゼンにもわからなかった。ただデイルタイがパウルゼンよりも13歳年長であったことは確かである。ところがその後パウルゼンは、これはシェーラーの打った芝居で、そのトリックのみごとにパウルゼンがひっかかったのだということを知らされた。いったいシェーラーの仕組んだトリックとは、何だったのであろうか。

シェーラーは既に述べたように、絶対に秘密にしておくべきことを、パウルゼンにもらした。この話を聞いて、パウルゼンは怒った。しかしその時既に、シェーラーはパウルゼンが怒り出すことを計算に入れていたのである。パウルゼンはその時は全く知らなかったのだが、シェーラーとデイルタイとはもともと親友同志であった。だからシェーラーは教授会でもデイルタイの方を押していた。そんなシェーラーからすれば、対抗馬のエルトマンをけ落とすためには、何らかの策をほどこす必要があった。その時、目にとまったのが、37歳でまだ助教授のままにいるパウルゼンである。エルトマンはパウルゼンよりも、はるかに年下である。エルトマンが正教授になるという話を、パウルゼンの耳に吹き込めば、彼が怒り出すことは目に見えている。シェーラーは、まだ決まってもいない話を、パウルゼンの耳に吹き込み、彼の感情をあやつり、彼を怒らせ、その怒りを利用して、自分の目的を遂げようとしたのである。それからは、すべてはシェーラーの筋書通りに事態は進行した。パウルゼンの怒りは、教授デイルタイを実現するための小道具として使われたのである。シェーラーは目的を遂げたが、パウルゼンは深く傷ついた。それからはパウルゼンの学部内での孤立は、更に強まった。自分のエゴイステイックな目的実現のためとあれば、他人の感情をもあやつってもかまわないという、この教授会の体質を、彼は心の底で拒絶しようとした。

パウルゼンがベルリン大学の正教授のポストを獲得したのは、1894年、彼が48歳の時のことである。彼の教授昇進の背後に、アルトホーフがあったことは明白である。おそらくアルトホーフなしには、彼は生涯教授になれなかったであろう。一時パウルゼンの将来は絶望的となっていた。彼自身、一生涯助教授のままで結構と、ほぞを決めたこともあった。勿論、その間には正教授の話がいくつかあった。たとえば、ロツエ後任をめぐる不愉快な事件の直後、ブレスラウ大学の正教授の話があった。この話は文部省から出た話である。しかし彼はいまさらそんな田舎大学に都落ちする気にはなれなかった。ベルリン大学の教授、同輩達はしきりにこの話を受けるよう彼を説得した。なかには、この話を断れば、もはやプロイセン中の大学から、二度と正教授の口がかかることはあるまい、と忠告、もしくは脅しをかける者もいた。しかし最後に彼はこの話を断った。またその後、ミュンヘン大学の話もあったが、そ

れも断った。1893年、ライプティヒの正教授になる話が出た時には、彼も迷った。しかしあくまでもベルリンに執着する彼は、この話も断った。彼と同年配でいまだに助教授でいるのは、彼ぐらいとなってしまった。他の助教授は、いつの間にか、皆彼の教え子ばかりになっていた。ベルリン大学哲学部のなかで、彼は益々孤立していった。

パウルゼンとアルトホーフの関係は、1882年、例のエルトマン事件の時にさかのぼる。シェーラーの汚い策謀にひっかり、怒り心頭に発した彼が、文部省にかけ合い行った時、彼の話聞いてくれたのが、その時ストラスブルク大学からプロイセン文部省に着任してきたばかりのアルトホーフであった。パウルゼンは正直にアルトホーフにむかって、ブレスラウに行く気にはなれないと話すと、アルトホーフはこういった。「貴方がその気ならば、どうです、ベルリンに残ったら。貴方のポストなら、用意出来ますよ。今哲学のポストを作り、若い人をそこにすえようと考えているところです。いずれそのうちに、貴方のための正教授のポストが出来ることになるでしょう。私が大臣に直接話してみましよう」。

しかしその後、パウルゼンにはベルリン大学の正教授になる話は、すぐはもち上がらなかった。しかし、彼は1894年4月、ついにベルリン大学哲学部の正教授の座にすわった。その時、彼にお目出とうの声をかけてくれたのは、ほんの数人の者だけであった。

「正教授になっても、他の同僚との関係は、すこしも変わらなかった。ただ変わったといえば、雑用が増えた。毎週木曜日の午後は、教授会と博士学位試験のために潰れるようになった。どちらとも、私には余り楽しいものではなかった。教授会では、きわめて些細なことをめぐって、長々しい雄弁が展開された。とくにきわだっていたのは、古典語の教授達の際限のない議論のむし返えしであった。彼等は、一旦自分のいったことに、頑固に固執した。そうなるともう、どの意見が正しくて、どれがまちがっているかなど、問題ではなかった。²²⁾

パウルゼンは教授会を嫌った。教授会という仕組を嫌った。そして、同僚とのつきあいを嫌った。日頃からつきあいをよくしておかなければ、いざという時に邪魔をされるという学部の体質、学者集団の体質を嫌った。表面的にはあいそ良くつき合っているかのように見えながら、腹の底では醜い打算がうごめき、あたかも平等な構成員による民主的合議体のような装いをこらしながら、実のところは、エゴイステイックな自己主張と足の引っぱり合いの場でしかない教授会という組織を嫌った。そこには彼の苦い体験が、投影されていたことであろう。あるいは、彼のパーソナリティも関係していたことであろう。パウルゼンはその回想録を読む限り、同僚とのつきあいがへたであったように思える。もっと学部同僚との接触を密にしていれば、むざむざシェーラーのトリックなどにひっかからないで済んだのかもしれない。もっとも、彼が、廊下とんびになり、軽薄な内幕情報屋になり下ることを潔しとしたかどうか、筆者には、何ともいえない。ともかく彼の心を楽ませてもらったものは、学生の前での講義であり、学生とともにやるゼミナールであり、研究であり、著述活動であった。事実、彼はさまざまな雑誌に寄稿し、評論活動を行った。しかし、こうした活動をアカデミックなものとは見なさない教授達からは白い目で見られた。同僚とつきあったり、教授との交際を深めたり、悪い言葉を使えば、顔つなぎをしたり、ご機嫌をとったりすることは、彼の性分に合わなかったのであろう。あるいはもっと正確に言えば、そういうことをしなければ、損をするという暗黙の圧力、更にはこうした圧力の源泉となっている教授会という組織を拒絶しようとしたのかもしれない。学部内で孤立した彼にとって、救いの主は、学部外にしかなかった。彼を正教授にしてくれたのは、ベルリン大学哲学部の教授会ではなく、プロイセ

ン文部省大学局長アルトホーフだったのである。

学問の自由とアルトホーフ

アルトホーフの情報量は、だれにもまさっていた。だから、彼は、どこかの学部から、教授候補者が推薦されてくると、その弱点をきわめて適切に指摘することができた。彼はその推薦が、何かの個人的コネのために決定されたのではないか、派閥的情実にもとづくものではないか、誰か優れた教授が来たら、自分たちの影が薄くなってしまうという、教授たちの恐怖心から決まったものではないか、など、学部の弱点を容易に見抜くことができた。

だからここに、彼は決して不公平な人事はやらなかった、という評価が成立することになる。現にウェーバーはアルトホーフを非難しながらも、「彼のもとでは閥族主義はありませんでした」といっているのではないか。更にまた日頃は学部教授会擁護の側に回るリベラル左派のフランクフルト新聞でさえ、その社説のなかでこう論じたのではないか。「文部省が広い立場に立って勝利に導かなければ、了見の狭い学部教授会は多くの誤りを犯し、現にそれを犯してきたではないか。たとえば、カトリック教徒、ユダヤ人学者に対する偏見は、文部省内部よりも、学部教授会の方にはるかに多くひそんでいるのだ。文部省が宗教上の理由で、それ以外何ら欠点のない学者を拒否したことが一回あるとすれば、学部教授会はそれよりも10倍も多くの割合で、そうした学者を文部省に向けて、提案さえしなかったではないか²³⁾

事実、アルトホーフ以前のプロイセンでは、社会民主党員が、正教授になる可能性は全くなかったし、ユダヤ人が正教授になる可能性もなかった。カトリック教徒もまた正教授になるのは困難であった。しかし、アルトホーフは、こうした差別をしなかったとされている。1880年（つまり、アルトホーフの着位以前）、正教授のうち、カトリックの占める割合は、15%だったが、1896/96年度にはその割合は17%にふえた。また、ユダヤ人の割合は、1880年には3%であったが、それが、1896/97年度には、わずかとはいえ、4%に増加した。

ここにアルトホーフは、学部教授会以上に公平な人事を行ったという評価が成立することになる。そして、学問の自由を擁護したのは、学部教授会よりもアルトホーフだったのだという評価が形成されることになる。パウルゼン、デルブリュック、シュモラー、ハーナックなどからすれば、学問研究の自由に対する脅威は、文部省から来るのではなく、まず第一には、政党、その他諸々の利益集団という外部の集団からくると見えた。更にはまたこうした外部集団ばかりではなく、学部教授会そのものが、そうした脅威の源泉として映じてくる。こうした状況のもとでは、アルトホーフのもとにある文部省こそが、こうした勢力に対する防波堤の役割を演じているものに見えた。

大学はいまや、諸々の利害集団、イデオロギー集団の縄張り抗争の草刈り場の様相を呈し始めていた。さまざまな利害集団の利権争いが頂点に達すれば、今やこれら個別利害を超越した機構に、決定を求めると、道はなくなる。学部はその自治権を自ら放棄して、文部省の決定、選択に身をゆだねるほかなくなる。²⁴⁾

ここにアルトホーフ体制が、いきいきとした存在として登場する基盤があった。アルトホーフ側からすれば、いくら「学問の自由、自治」を標榜しても、自ら公平な教授選考さえ出来ず、派閥抗争をくり返し、コネ人事の横行する学部教授会に対する悔蔑感が生まれる。このときがアルトホーフの出番なの

だ。しかも腹の底では教授達を軽蔑しながらも、学問の自由の擁護者という輝ける衣装をまとって登場するチャンスが開かれることになる。

ビスマルクは、今や学者共和制を叩き潰さねばならない、といった。しかしアルトホーフはこれに対して、「自分の目の黒い間は、そうさせない」といった。アルトホーフは教授達の合議制がいかに脆弱であるか、見抜いていた。ことある度に「教授会の自治」を叫びながら、結局は内輪喧嘩に終わり、最後には自分が出ていかねば事が納まらないことを、十分に知り抜いていた。そうであれば、ビスマルクのように、力をもって「教授会の自治」を押し潰すまでもないのだ。それほど「教授会の自治」が欲しいのなら、自由にやって見るがよい。「教授会の自治」などしょせん、それを認めれば、認めるほど、内部抗争の果に、内部から自然崩壊の道を辿るだけのものではないか。だから彼は安心して、「自分の目の黒いうちは、学者共和制を叩き潰すようなことはさせない」といえたのである。アルトホーフにすれば、教授会の自治は、自分の影響力を低下させるどころか、かえってそれを強固にしてくれる最大の武器として写った。

実際問題、アルトホーフ時代には、それ以前の時期とは異なり、学部の推薦によらない、文部大臣専決人事はかなり減少した。アルトホーフが文部省入りをした1882年以前では、プロテスタント神学部、法学部、医学部の教授人事、総数859件中、文部省専決人事は、240件、つまり全体の28%に達していた。ところが1882年から1900年までのアルトホーフ時代をみると、496件中82件、つまり17%へと減少している。またベルリン大学哲学部での教授人事だけとり出してみると、1817年から1882年までの88件の教授人事のうち、専決人事は27件、つまり31%の多きに達していた。ところが1882年から1900年の期間では、34件中わずかに4件、つまり12%へと減少した。²⁵⁾

しかしこれをもって、アルトホーフが学部の提案権を尊重したとする訳にはいくまい。彼は各大学、各学部に、きわめて親しい関係にある教授をそれぞれ配置していた。これらの教授を通じて、彼は詳細な情報をたえず集め、教授人事が起これば、学部のなかでどんな意見が戦わされているのか、確実な情報を握ることが出来た。そして、これからの教授を使って、学部教授会の意向をコントロールすることが出来た。だから文部省の彼のもとに教授候補者リストが提出される時には、既に下相談は十分出来上がっていたのである。彼はこうしたネットワークを活用して、学部教授会の提案権とむき出しの衝突をあえてするまでもなく、思い通りの人事政策を展開できたのである。

ウェーバーとパウルゼン

ここでもう一度、この小論の冒頭に証人として登場してもらったウェーバーに戻ることにしよう。先にも述べたように、ウェーバーのアルトホーフ批判は、微妙なニュアンスを含んでいる。基本的にはアルトホーフ批判であることは明白であるが、アルトホーフの果した功績に対しては、十分な評価を与えている。これはけっして死者を批判する立場に立った者が、死者に対して払う敬意、気配りという次元を越えたものであろう。ウェーバーのなかにも、その当時の多くの教授達と同様、アルトホーフを批判の対象としながらも、他方では、彼が学問、大学に対して行った偉大な功績を認めないわけにはいかないという、押えがたい気持があったのであろう。まさに、アルトホーフ体制の本質はこうした両義性、もしくは多義性にあったのだ。このことはパウルゼンにおいても同様であった。彼はウェーバーとは対照的に、学部教授会の支配よりも、アルトホーフ体制により多くの信頼を寄せた。おそらく、こうした

両者の相違は、彼等が受けた苦い個人的体験と無関係ではあるまい。パウルゼンがシェーラーのトリックにかかったと同様、ウェーバーはウェーバーでアルトホーフのトリックにかかった。あるいは少なくとも、ウェーバーはそう思った。この辺の詳細は上山安敏教授の分析に譲らざるを得ないが、²⁶⁾ ウェーバーはこうした苦い体験のなかから、アルトホーフ体制に対する彼なりの評価を築き上げたのであろう。しかしながら、両者の間に果してどれほどの決定的な距離があったのか、という点になると、疑問に思えてならない。確かにウェーバーは、その発言、具体的行動においても、アルトホーフ体制に対する批判者としての役割を演じた。しかし、このウェーバーとても、果してどこまで教授会という機構、彼の用語をもってすれば、身分制同僚支配を信頼していたかは、疑問に思える。もしウェーバーの眼前にアルトホーフ体制が生なましい実在として、存在していなければ、彼の批判の矢、批判のエネルギーは案外、教授会という機構に向けて放たれていたのかもしれない。

問題の焦点は、組織的官僚支配と身分制的同僚支配のどちらがましか、という次元にとどまることは出来ない。いかなる制度といえども、それなりの利害得失を持っている以上、それを利に変えるか、害に変えるかは、その制度を担う具体的人間の問題である。あらゆる制度は、それを具体的に担う生身の人間の具体的行為を通じて、はじめて制度として動き出す。さまざまな制度、機構は、それ固有の傾向性（シナリオ）を持っているとはいえ、そのシナリオにしたがってドラマを演じる舞台俳優の個性に応じて、一つのシナリオから多様なパフォーマンスが導き出されてくる。その意味で、それぞれの制度、機構がそなえている固有の傾向性は、鉄の性質、銀の性質のように、はじめから最後まで一定不変のものとしてある訳では、けっしてない。このことが窮極的に意味することは、いかなる制度、機構といえども、ただそれだけで、無条件に、つまりより具体的にいえば、それを担っている人間を問わずして、神聖化することは出来ないということである。具体的な人間とは、それほどの重みをもった存在なのだ。

この小論には、「現代的意味」なる副題がつけられている。さしずめ、このあたりで、その「現代的意味」なるものを論じなければならないのであろう。しかし、果してその必要はあるであろうか。以上に記したことはすべて今から80年、90年昔の話である。しかしこれらの話は、すべて過ぎ去った過去のことであろうか。過去ほどなまなましく現在を語っているものはあるまい。そして過去ほどなまなましい形で、未来を暗示しているものはあるまい。たしかにこの間に、いくつかの変化があり、舞台背景は変わり、舞台装置も変わり、小道具は変わった。しかし我々は本質的な部分では、いささかも変わってはいない。なぜ変わらなかったのでしょうか。その答えは、たとえ舞台背景が変化し、舞台装置が変わっても、そこでドラマを演じる俳優は、すべて「人間」だからである。「人間」ほど変わらない存在はない。多分、そこに人間の怖さがあるのであろう。

注

- 1) 上山安敏, 三吉敏博, 西村 稔編訳『ウェーバーの大学論』木鐸社, 1979年, 79--89頁。
- 2) マリアンネ・ウェーバー, 大久保和郎訳『マックス・ウェーバー』みすず書房, 1965年, 159頁。
- 3) 上山安敏ほか, 1979年, 上掲書, 88--89頁。
- 4) Sombart, Werner, *Althoff*, Neue Freie Presse, Nr. 15, 427, Wien, 4, 8. 1907, in Von Brocke (1980)
- 5) Pfetsch, Frank R., *Zur Entwicklung der Wissenschaftspolitik in Deutschland: 1750--1914*, 1974
Busch, Alexander, *Die Geschichte des Privatdozenten: Eine soziologische Studie zur grossbetrieblichen*

Entwicklung der deutschen Universitäten, 1959

- 6) 中山茂著『歴史としての学問』中央公論社, 1974年。
- 7) Storr, R.J., *Harpers University, The Beginnings*, 1965.
- 8) Elliott, Orrin Leslie, *Stanford University: The First Twenty Years*, Stanford University Press, 1937.
- 9) Rudolph, F., *The American College and University: A History*, 1962.
Curti, M, and Nash R., *Philantoropy in the Shaping of Higher Education*, 1965.
Miller, H.S., *Dollers for Research, Science and Its Patrons in Nineteenth Century America*, University of Washington Press, 1970.
潮木守一『大学と社会』(教育学大全集第六巻), 第一法規出版, 1982年。
- 10) Lenz, Max, *Geschichte der Universität Berlin*, 4 Bände, 1910.
- 11) 『文部省年報』明治33年。
- 12) 藤瀬浩司, 吉岡昭彦「第一次世界大戦前主要国国際金融の趨勢」『調査と資料』1985年, による換算。
- 13) McClelland, Charles E., *State, Society and University in Germany 1700—1914*, 1980, p. 284.
- 14) McClelland, Charles E., 1980 *op. cit.*, p. 281.
- 15) Christian von Ferber, *Die Entwicklung der Lehrkörpers der deutschen Universitäten und Hochschulen 1864—1954*, Vandenhoeck und Ruprecht, 1956, s. 195.
- 16) Von Brocke, Bernhard: *Hochschul-und Wissenschaftspolitik in Preussen und im Deutschen Kaiserreich 1882—1907: das "System Althoff"*. in Peter Baumgart (hrsg) *Bildungspolitik in Preussen zur Zeit des Kaiserreichs* (1980)
- 17) ラートブルフ, 山田晟訳『心の旅路』(ラートブルフ著作集第10巻) 東京大学出版会, 95頁。
- 18) Meinecke Friedrich, *Autobiographische Schriften*, (hrsg.) Eberhard Kessel, 1969, S. 132.
- 19) Paulsen, Friedrich, *Die Deutschen Universitäten und das Universitätsstudium*, 1902, S. 101—102.
- 20) Paulsen, Friedrich, 1902, *op. cit.*, S. 101—105.
- 21) Paulsen, Friedrich, 1938, *An Autobiography*, S. 367—368.
- 22) Paulsen, Friedrich, 1938, *op. cit.*, S. 358.
- 23) Von Brocke, *op. cit.*, S. 85
- 24) Andernach, Norbert, *Der Einfluss der Parteien auf das Hochschulwesen in Preussen 1848-1918*, 1972, S. 207—216.
- 25) Paulsen, Friedrich, 1902, *op. cit.*, S. 101—102.
- 26) 上山安敏, 前掲書, 1978年。

参 考 文 献

- Andernach, Norbert: Der Einfluss der Parteien auf das Hochschulwesen in Preussen 1848—1918. (1972)
- Von Brocke, Bernhard: Hochschul- und Wissenschaftspolitik in Preussen und im Deutschen Kaiserreich 1882—1907: das "System Althoff". in Peter Baumgart (hrsg) Bildungspolitik in Preussen zur Zeit des Kaiserreichs (1980)
- Busch, Alexander: Die Geschichte des Privatdozenten. Eine soziologische Studie zur grossbetrieblichen Entwicklung der deutschen Universitäten. (1959)
- Curti, M. and Nash, R.: Philanthropy in the Shaping of American Higher Education. (1965)
- Elliott, Orrin Leslie: Stanford University, the first Twenty-five Years. (Stanford University Press, 1937)
- von Ferder, Christian: Die Entwicklung des Lehrkörpers der deutschen Universitäten und Hochschulen 1864—1954. (Vandenhoeck und Ruprecht. 1956)
- Hawkins, H.: Pioneer, A History of the Johns Hopkins University, 1874—1889. (Cornell University Press, 1960)
- Jarausch, Konrad H.: Students, Society, and Politics in Imperial Germany. The Rise of Academic Illiberalism (1982)
- Jarausch, Konrad H. (ed): The Transformation of Higher Learning 1860—1930. (1983)
- Lenz, Max: Geschichte der Universität Berlin. 4 Bände. (1910)
- McClelland, Charles E.: State, Society, and University in Germany 1700—1914. (1980)
- Meinecke, Friedrich: Autographische Schriften. (hrsg von) Eberhard Kessel (1969)
- Miller, H.S.: Dollars for Research, Science and Its Patrons in Nineteenth Century America, University of Washington Press, 1970
- Paulsen, Friedrich: Die Deutschen Universitäten und das Universitätsstudium (1902)
- Paulsen, Friedrich: Die Geschichte des Gelehrten Unterrichts. (1921)
- Paulsen, Friedrich: An Autobiography. (1938)
- Pfetsch, Frank R.: Zur Entwicklung der Wissenschaftspolitik in Deutschland 1750—1914. (1974)
- Prahl, Hans-Werner: Sozialgeschichte des Hochschulwesens. (1978)
- Riese, Reinhard: Die Hochschule auf dem Wege zum wissenschaftlichen Grossbetrieb. (1977)
- Ringer, Fritz K.: Education and Society in Modern Europe. (1979)
- Ringer, Fritz K.: The Decline of the German Mandarins, The German Academic Community, 1890—1933. (1969)
- Rudolph, F.: The American College and University. A History. (1962)
- Sombart, Werner,: Althoff, Neue Freie Presse, Nr. 15 427, Wien, 4.8.1907, in von Brocke (1980)

- Storr, R.j.: Harpers University, The beginnings, 1966.
- Veysey, L.R.: The Emergence of the American University. (1965)
- 東北大学編：東北大学五十年史（上，下）（昭和 35 年，東北大学）
- 上山安敏：法社会史，みすず書房，（ 1966 ）
- 上山安敏：ウェーバーとその社会，ミネルヴァ書房，（ 1978 ）
- 上山安敏，三吉敏博，西村 稔編訳：ウェーバーの大学論，（木鐸社， 1979 ）
- 潮 木 守 一：大学と社会，教育学大全集第六卷，第一法規出版，（ 1982 ）
- ウェーバー・マリアンネ：マックス・ウェーバー，大久保和郎訳，みすず書房， 1965 年。
- 藤瀬浩司，吉岡昭彦：第一次世界大戦前主要国国際金融の趨勢（ I ），「調査と資料」第 81 号，名古屋大学経済学部附属経済構造分析資料センター， 1985 年。学出版会。
- 中山茂：歴史としての学問，中央公論社， 1974 年。
- ラートブルフ著作集，第 10 卷，心の旅路，山田晟訳，東京大学出版会。

Prussian Bureaucrats and Professors at the Turn of the Century.

Morikazu Ushiogi*

This paper deals with the conflict between Prussian bureaucrats and professors concerning “academic freedom” at the turn of the century. Althoff, a bureaucrat in the Prussian Ministry of Education and Culture, is well-known as a major figure who dominated Prussian higher education and science from 1882 to 1907. The basic question is why he was able to reign over the total system of higher education and science in Prussia and even Germany. Two aspects should be considered, namely (1) the emergence of “big science” and the increased financial dependence of professors on the central government for research money, (2) the inefficiency of the guild-like faculties as agencies for selection of suitable professors. In contrast to the U.S., where a number of private philanthropists donated considerable funds to universities and research activities, in Prussia the only agency supporting universities and science was the central government. Rockefeller donated almost 35 million dollars for starting the University of Chicago, the amount of which corresponded to 35 years of the annual budget of Berlin University and 70 years of Tokyo Imperial University of those days. Prussian professors who needed to establish new research institutes and new chairs to keep pace with the scientific revolution in the world had to depend on Althoff’s favor through personal connections with him. This kind of mentality was criticized by Werner Sombart as a servile attitude which jeopardized the independence of the university and science. Although Sombart tried to organize a Conference of University Professors to stand against the “Althoff System”, the general attitude of professors toward Althoff and his “System” was ambivalent. In fact, Althoff’s intervention in the faculty appointment procedure was welcomed by some professors. In his autobiography, Paulsen claimed that to make the faculties the sole arbiters in the appointment of professors would be the quickest way to ruin the German universities. From his own personal experience, he never trusted the faculty as an agency to select prominent professors and to make recommendations to the Ministry of Education. Paulsen, isolated among his colleagues in the Faculty of Philosophy at Berlin University, was never recommended to full-professor by the Faculty. His promotion was realized, not through the initiative of the Faculty of Philosophy, but through Althoff’s intervention into the appointment procedure. Paulsen thought that the main threat to academic freedom came from the narrow-minded and selfish faculties rather than from the Ministry of Education. Paulsen as well as some other professors took the “Althoff System” to be the guardian of academic freedom. Although this story is now 80 year old history, it poses many important questions about the real meaning of academic freedom and about who can maintain it.

* Professor, Faculty of Education, Nagoya University